令和８年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

（学校推薦型選抜Ⅰ）

小　論　文

（地域学部 地域学科 地域創造コース）

（注 意）

1．問題冊子は，指示があるまで開かないこと。

2．問題冊子は３ページ，解答用紙は２枚，下書用紙は２枚である。
指示があってから確認し，乱丁，落丁，印刷不鮮明の箇所等がある場合は，ただちに試験監督者に申し出ること。

3．解答は解答用紙（横書き）に記入すること。

4．下書，メモ等を試みる場合は，下書用紙又は問題冊子の余白を利用してよい。

5．**解答用紙を持ち帰ってはならない**が，問題冊子（及び下書用紙）は必ず持ち帰ること。

【問題】　次の文章を読んで、後の問題に答えなさい。

80年代はまさに、イタリアが輝きを大きく取り戻した時期である。都市のチェントロ・ストリコ（旧市街）の価値が著しく高まり、そればかりか同時に、1960年代の高度経済成長期に犠牲になり、無視されてきた田園、農村に関心が向き、その再評価の動きが大きく展開したのである。本来、イタリアの特徴だった都市と田園の密接な結び付きの回復をめざす考え方が強まり、「テリトーリオ」の言葉が都市計画、建築の分野で大いに使われるようになったのが70年代から80年代にかけての時期である。

そもそもイタリアでは本来、都市と田園は有機的に結び付き、相互に支えあって独自の地域性を生んでいた。それが人々の誇りでもあった。ところが、近代化・工業化は、都市の論理にもとづく発展を最大限優先させ、都市化を善と考える開発を押し進めた。鉄道、近代の道路、工場ゾーンが新たな地域構造を生み出し、一方、農村は、多くの若者が大都市へ移住し、労働力を失って衰退・疲弊した。都市と農村が密接につながった本来のテリトーリオの姿が崩れた。流通の近代化、グローバル化のなかで、かつて成立していた地産地消のあり方も意味を失った。

イタリアらしさを失わせるこうした近代的開発への反省が強く起こったのが、1980年代だったといえる。すでに述べたようにチェントロ・ストリコの保存再生に成功したイタリアは、その次の課題として、テリトーリオの本来の底力、個性、アイデンティティを取り戻すことに取り組んできた。それが地産地消のスローフード運動であるし、地理的表示（GI）をイタリアが強力に推進する背景にある哲学なのである。まさにイタリア的な復元力がこの間、働いてきたといえよう。

テリトーリオという言葉は古くから存在するが、80年代に入るころから、この言葉がより頻繁に使われるようになったと感じられる。大きく進展する地方分権化を背景に、人々が我が町、我が地域のアイデンティティをより強く意識するようになったことも背景にあるだろう。同時に、近代化・工業化の反省に立って、都市周辺に広がる田園、農村の魅力、豊かさ、ポテンシャルの再発見、再評価に向けての思いを込めて、この言葉を意図的に使うようになったと思われる。

その意味をここで掘り下げて考えてみたい。「テリトーリオ」（地域、領域）とは、一般に領土と訳される英語のテリトリー（territory）とは概念がかなり異なり、実にイタリアらしい言葉である。バルバラ・スタニーシャ氏によれば、テリトーリオは、土地や土壌、景観、歴史、文化、伝統、地域共同体、等々のさまざまな側面が併せ持つ一体のものと定義される。さらに説明を加えると、土地の持つ自然条件、あるいは大地の特質を活かしながら、そこを舞台に人間の多様な営みが展開してきた。農業、牧畜、林業、諸々の産業が営まれ、町や村の居住地ができ、田園には農場、修道院が点在し、これらを結ぶ道のネットワークもできる。そこに歴史や伝統が蓄積され、固有の景観が生まれてきた。こうした社会経済的、文化的なアイデンティティを共有する空間の広がりとしての地域あるいは領域が「テリトーリオ」なのである。ワイン文化と結び付いていたフランス語の「テロワール」の考え方とテリトーリオの基本的な違いは、そこに空間構造をとらえることも、都市組織と同様にその組織を分析することも可能だという点にある。従って、テリトーリオは都市と同様、その空間構造を読むことができると同時に、80年代には、都市計画の枠を広げ、テリトーリオ計画（pianificazione territoriale）ということが重要な課題になったのである。

・・・中略・・・

イタリアの魅力は都市の歴史、文化だといわれてきた。だが、80年代以後、この国の持つ自然条件の多様さ、美しさにも目が向くようになった。そもそも都市の繁栄を生み出した背景には、周辺に広がる豊かな農村、田園が存在したのである。もともとイタリア都市は、西欧でもアルプス以北の国以上に都市と田園の結び付きが密接だった。中世都市の周辺農村領域であるコンタードの重要性がしばしば指摘されてきたのである。

イタリアの地産地消は、逆転の発想に立つといえるのではなかろうか。この国では都市に住む貴族が田園で農場を経営し、農民が城壁内に住むのがごく普通だった。都市が農村から自立せず、封建的性格を残した姿は、西欧では遅れた形態と否定的に見られる傾向があった。だが文明が一巡すると、事情が逆転し、都市の周辺に豊かな農地があり、市民が田園に土地を持つのは最高の贅沢となったともいえる。

そもそも、地形や自然条件が多様である点は、日本とイタリアはよく似ている。国土が南北に長く、海に囲われ、山間の土地が多く、川の流れも早い。リアス式海岸もあるし、背後に丘や山が迫る港町が多い。しかも火山性の土地で地震が頻発する。洪水、がけ崩れもあり、災害大国でもある。当然、両国には、減災のための知恵や信仰心が生まれ、人々の絆も強まった。逆に、災いの裏に恵みがある点もよく似ており、肥沃な土地での農業、温泉文化も発達した。

自然の恵みは、料理の多様性を生んだ。どの地域でも自慢の料理を味わえるのが嬉しい。季節の旬の味を楽しめるのもイタリアと日本の共通点である。

風景の多様さは21世紀の価値観にとって、最高の宝物である。近年、自然と人間のコラボレーションでできた美しい風景は文化的景観として高く評価される。この点でもイタリアと日本は世界でも双璧といえよう。現在の日本の社会に、都市文化とは異なるこうした新たなライフスタイル、価値観に立ったイタリアの魅力が急速に影響を与え始めたのも、当然のことのように思える。

日本の国土全体に目をやると、地方創生の言葉とは裏腹に、現実には開発のアンバランスがさらに加速しているように見える。東京都心に再開発がさらに集中し、国家的戦略のもと、容積率の増大を認める特区の制度を用いて高層ビル群が続々と出現する。一方、地方都市は元気を失い、豊かだった田園が疲弊し、内陸部の山間には限界集落がたくさん生まれている。

出典）陣内秀信「チェントロ・ストリコからテリトーリオへ—田園の再評価とその再生」木村純子・陣内秀信編著『イタリアのテリトーリオ戦略—甦る都市と農村の交流—』白桃書房、2022年、23−57頁。

（出題にあたり、文章の趣旨が変わらない形で原文中の小見出し、本文の一部、引用表記を省略した。）

問1　課題文で述べられている「テリトーリオ」とは何か。この概念がイタリアにおいて注目されるようになった背景も含めて、300字以内で説明しなさい。

問2　今後、日本においてテリトーリオを軸とした地域づくりが広がっていく可能性について、具体的な地域や事柄を挙げながら、700字以内であなたの考えを述べなさい。